

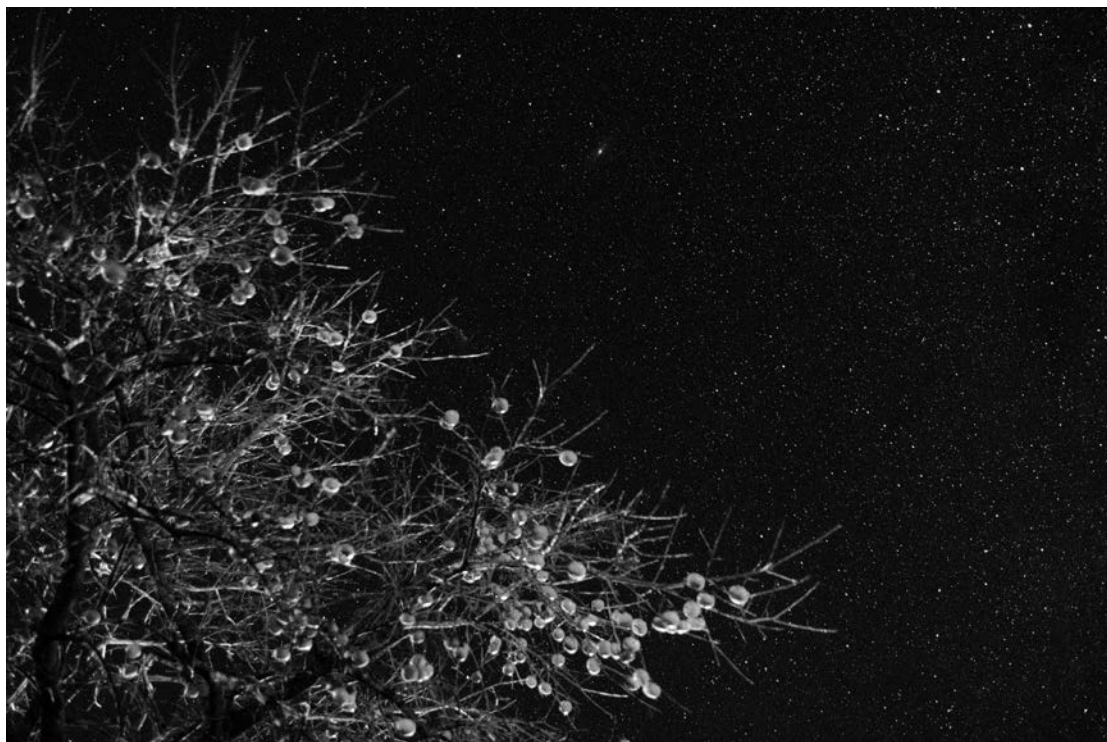
Alumni Association Report

日本大学芸術学部校友会報

110

2023

春季号



日本大学芸術学部
校友会ホームページ

8つのアート1つのハート

N  **U**
Nihon University College of Art
Art

日本大学芸術学部

CONTENTS

新学部長と対談	03
江古田会ニュース	
青森江古田会・岩手江古田会	06
新潟江古田会・長野江古田会	07
愛知江古田会・宮崎江古田会	08
第17回 日藝賞	09
第16回日藝賞受賞記念講演会	10
学科主任のごあいさつ	11
皆さん今日は！	15
学科ニュース	
写真学科・映画学科	17
美術学科・音楽学科	18
文芸学科・演劇学科	19
放送学科・デザイン学科	20
2022年日芸祭報告	21
木村学部長からサプライズ寄付!!	21
校友会からのお知らせ	22
編集後記	22



日本大学芸術学部HP
<https://www.art.nihon-u.ac.jp/>



日本大学芸術学部校友会HP
<https://koyu.art.nihon-u.ac.jp/>

校友会ヒストリー

1989(明治22)年10月に日本大学の元となる日本法律学校が創立され、1921(大正10)年3月に日本大学法文学部内に美学科(芸術学部の前身)が開講。その後学科や専攻が増設、1937(昭和12)年7月には、校友会第1回幹事会が開かれて、校友会の活動が始まりました。戦争や江古田校舎全焼という苦難を乗り越えて、1948(昭和23)年4月に、正式に日大芸術学部校友会発足が発足し、初代会長に栗田柳一郎氏が就任。翌年には学制改革で正式に写真・映画・美術・音楽・文芸の5学科からなる「日本大学芸術学部」が誕生しました。



総会
懇親会
のお知らせ

2023
7 / 1

その後、校舎は増築され、演劇・放送学科も加わり7学科となり、熊本江古田会の設立を皮切りに、各地に校友会支部が発足していきます。

1989(平成元)年4月に所沢校舎が完成して教養課程と一部専門科目が江古田から移転しました。

1996(平成8)年4月にはデザイン学科を設置し8学科となって日芸はますます発展し、校友会支部も海外を含めて続々と誕生していきました。

2010(平成22)年、江古田キャンパスに建設中だった新校舎がすべて完成して修祓式を挙行了しました。

2017(平成29年)年、校友会11代会長に田上峻詞氏が就任して現在に至っております。

2019(平成31)年4月、30年ぶりに全学年が江古田に戻り、「江古田通年化」を達成した記念・支援として校友会は719万2000円を学部へ寄付し、芸術学部創立100周年を記念して「百藝手拭い」を制作。2020(令和2)年12月には新型コロナウイルス感染症緊急支援として学部へ500万円の寄付も行いました。



●総会

日時:令和5年7月1日(土)14時～

会場:日本大学芸術学部内

*当日正門にてご案内致します。TEL.03-3554-5363

議題 1.会務報告 2.会計報告 3.予算審議 4.役員改選

●芸術学部校友会設立75周年記念式典(懇親会)

日時:総会終了後 17時からの予定

●喜寿を超えられた卒業生…ご招待

●それ以外の卒業生…5,000円

*総会が長引いた場合は終了後ただちに懇親会に移ります。

●総会終了後、お弁当をお持ち帰りください。

●コロナウイルスの感染状況によって突然変更する場合がございます。

※校友会ホームページ、twitterでご確認くださいか、校友会事務局に電話(03-3554-5363)で確認をお願いいたします。

※ご出席頂く場合にご注意いただきたいこと

・当日会場の混雑状況によりマスクの着用をお願いする可能性がありますのでマスクをご持参して頂きたいと思っております。

・当日発熱・体調不良の方は入場をお断りすることがあります。

・校友会員の皆様の安全確保を最優先といたしたく、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

サプライズゲストあり!



川上学部長 VS 校友会会長

新学部長と対談

田上: 川上学部長に於かれましては、本日午前中に日本武道館での本部入学式にご出席になり、午後一番で日藝の大ホールでの新入生歓迎式にご出席なされました。たいへんお忙しいところ、貴重なお時間を頂きましてありがとうございます。

川上学部長: いえ、校友会の為なら全力で協力させていただきます。

田上: 早速で恐縮ですが、インタビューを始めさせていただきます。このインタビューは、2023 年会報誌春号に掲載する予定で、発行部数はおよそ 35000 部になります。

まず初めに川上先生のプロフィールからお聞きます。

お生まれはどちらでしたか？

川上学部長: えっ、そこからですか？

1968 年（昭和 43）55 歳（申年）東京都国立市（くにたち）で生まれました。父が広告代理店（媒体局勤務）に勤めていたのですが、突然、万博担当になり大阪に転勤、3 歳から 19 歳まで大阪に住んでいました。

当時は幼かったので万博の思い出はほとんどありません。

地元の公立の小学校、中学校に通いました。活発な子供だったと記憶しています。外で元気よく遊んでいた記憶があります。

ピアノは子供のころより習っていてバッハとか弾いていました。

クラシックが大好きだったのですが、小学校 3 年生のころでしたか、富田勲

さんがクラシック曲をシンセサイザーで発表されたのを聴聞いて、驚愕し、そこからシンセサイザーに夢中になりましたね。

坂本龍一さんの登場もあり、小学校、中学校はシンセサイザーに熱中、母親はもともとクラシックの音楽家でしたが理解してくれていたようです。実は、母方の家系が音楽家族だったんですよ。

特に祖母は芸大の前身、東京音楽学校



(旧制)卒業、私が音楽の道に進むことが必然だった気がします。

田上:たいへん地味な大人しい子供だった?

川上学部長:と思うでしょ。それが、母親がピアノの先生をしていたので、子供の私が仕事の邪魔だったみたいで、スイミングスクールとか、ヨット教室とかに行かされていて、アウトドア系もいける少年時代を過ごしていました。

田上:私からすると嫌なお金持ちの子供ですね(笑)

自宅ではピアノでバッハを弾き、スポーツ万能、ヨットも操り、学業は常にトップ、アメリカンフットボールもされて、まるで映画の若大将、文武両道ですね。高校は、大阪府立北野高等学校に進学され、元NHKの有働由美子さんは同級生だった。

北野高校出身者で有名なのは、元大阪府知事の橋下徹さん。

ちょっと調べてみましたが、北野高校の偏差値はものすごかった!(笑)

前身は旧制大阪第一中学校。

あの有名な手塚治虫さんも卒業生ですね。あと、森繁久彌さん。そうそうた

る顔ぶれですね。

その後、東京大学に進学なされました。

川上学部長:有働さんとは修学旅行委員と一緒にやっていたりと結構交流がありました。手塚治虫は私が記憶している一番最初のテレビアニメがリボンの騎士で、その時の音楽こそ富田勲先生だったのです。

大学は実は京都大学に行きたかったのです。京都大学で建築を専攻したかった。ですがそれが浪人しても受からなかった。

田上:えっ、そうなんですか?

川上学部長:一浪して漸く東京大学の理科二類に合格しました。当時、利根川進さんがDNAの研究でノーベル生理学賞をおとりになって、これからはDNAだと思い、理科二類に入る気になった。

実は二年目も京都大学は落ちました!ホントは京都大学の建築に行きたかった(笑)

田上:東大と京大同時に受験できたのですか?

川上学部長:当時は可能でした。そしていざ大学に入学すると、ほとんど

学校には行きませんでした。当時バブル時代で、演奏するだけでお金になるアルバイトが多く、リクルートのパーティなんか呼ばれ演奏を頼まれたりして、待遇が良かったですね。ほぼ毎晩、東京湾の船上で演奏していました。

田上:東京大学理科二類って理学部、工学部、農学部に進級しますよね。それなのにどうして日藝を再受験されたのでしょうか?

川上学部長:大学2年の時、富田勲先生が突然日藝の客員教授になられたとニュースを見て、即決受験を決めました。親に話せば当然反対されるので東大は休学願いを出し、日藝を受験しました。

田上:受験されて合格、憧れの富田先生の授業をお受けになられた?

川上学部長:はい、念願の富田先生の授業を3回受けました。

富田先生は私が入学して、2年くらいで辞められたのですが、大蔵康義先生、峰村澄子先生、綿村松輝先生、南広明先生、湯浅譲二先生と出会い、日藝に入ってホント良かったと心より思いました。湯浅先生には博士になるまで教えをいただきました。

湯浅先生はその世界でのパイオニア的存在で、カリフォルニア大学サンディエゴ校で作曲の教職についていた方で、電子音楽に傑作を残した伝説の方です。私は日藝に入り、湯浅先生の薫陶を頂くことができ、とても感謝をしています。日藝に入って情報音楽を追求していくと、やはりフランスに留学したくなるのです。

情報音楽の世界ではフランスが聖地なんです。

10代の後半から、ポンピドゥーセンターに憧れていました。

勿論、ポンピドゥーセンターの中にあ



る、国立音響音楽研究所(IRCAM)です。そして大学入学から13年後の2005年、日藝の音楽学科の専任講師となり、念願がかないフランスに一年間大学からの派遣で渡仏、フランス国立音響音楽研究所サウンドデザインチーム招聘研究員として働きました。

その時、頼まれて手掛けたのがフランス国有鉄道モンパルナス駅の誘導音です。これは、視覚障害者の方々への誘導電子音です。ジングルのようなサウンドロゴではなく、今電車が入ってきましたよ！とやさしく伝える。

私の代表作の一つです。

田上:なんか心がほっこりする話ですね。次の質問をさせていただきます。

これからの日藝をどうしていきたいですか？

川上学部長:自分の日藝での入学の理由の一つは、創作が自由にでき、教員も創作に励んでいることが魅力でした。標準化・同質化が進行している昨今、個性を大事にして、学生が・教員が自由に創作活動を追求できる環境を提供したい。それが学部長になった一番の動機です。

田上:なるほど、昔からの日藝はそうだった！次の質問です。

日藝生に求める事ってなに？

川上学部長:日本の芸術には日本独特の良さや個性があります。これはいわゆる日本舞踊や古典芸能だけではなく、日本の文化風土などに根付いた一般的な芸術の事です。

そのことが、今後グローバルに活躍していく日藝生を育てるのに重要だと思っています。

日本独特の感性や個性を持っていて、我々日本人にしかできないオリジナリティの創造、見つけて欲しいと思います。

田上:卒業生、新入生へのメッセージがございましたらお願いします。

川上学部長:卒業生には、日藝の十八番であるエンターティメントの先駆者としての伝統を受け継ぎ、妥協することなく、アグレシブに活動して行ってもらいたいですね。

新入生の諸君には、逆にこの時代背景の中で日藝を選択して入学してきたので、ほんとに芸術学部での創作を楽しむにきていていると思います。是非、夢に向かって走って欲しいですね。

田上:最後に校友会の皆様には何かメッセージを頂けませんか？

川上学部長:私自身、校友会では総務委員長を務め、各地の江古田支部会の先輩方にも大変お世話になってきました。人間の素晴らしさは、遠く離れていても、別々の人生を送っていても、思い出という共通の財産によっていつでもつながることができる点です。日藝という共通の財産を校友のみなさまといつまでもシェアできるように、その思い出の場所、日藝を末長く発展できるようにがんばっていきますので、今後とも応援よろしく願いいたします。

田上:

たいへんお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。

川上学部長の純真な気持ち、夢に向かって邁進する姿に、感動を覚えました。

そして、いよいよ夢の実現、日藝のさらなる進化を夢見て、川上先生には頑張ってくださいと思いました。

校友会もそんな川上先生を心より応援して参りたいと考えています。

本日はありがとうございました。



川上 央 (かわかみ ひろし)

1968年東京生まれ。

1996年日本大学芸術学部音楽学科卒業。

同大学院芸術学研究科修士課程修了後、2002年同大学院芸術学研究科博士課程中途退学。2003年博士(芸術学)学位取得。

2002年日本大学芸術学部音楽学科専任講師。2007年同准教授。2012年同教授。

専門は音のデザイン、芸術表現としての電子音やコンピュータ音楽。

日本音楽知覚認知学会常任理事などを歴任。

まとめ: 田上竣詞

撮影: 鯉江充

左から田中副会長、川上学部長、田上会長

「一度はおいで、青森ねぶた祭」

1980年、青森ねぶたと弘前ねぶたは、国指定重要無形民俗文化財となった。ねぶたとねぶたという呼び名の、「ぶ」と「ぷ」の違いには特に意味はなく、青森と弘前の祭りの差別化を図ったもの。青森は凱旋ねぶたで、人形ねぶた。弘前は出陣ねぶたで、扇ねぶた。前者は「ラッセラー」、後者が「ヤーヤドー」という掛け声になる。ラッセラーは照明用のろうそくを「出せ、出せ」が詠って「ラセラセ」になったという説があり、凱旋なので熱狂的だ。「ヤーヤドー」は馬を「ヤーヤー、ドードー」と操る掛け声だという説がある。弘前は「鞭声肅々夜河を渡る」、そんな出陣ねぶたである。



竹浪比呂央：作「龍王」

祭り開催の資金のほとんどは、栈敷席の販売収入によるもので、昨年は、百万円席などという、旅行会社主催による特別な栈敷が出て話題になった。

毎年5月に入ると青森港に面した青い海公園内に、ねぶた団地が建設される。大型ねぶたの仮設の制作小屋で、ねぶたラッセランドと呼ばれる。つい先日、経済面・安全面・衛生面などの理由から、近隣にある青森港新中央ふ頭に、常設建造物として制作小屋の建築を望むという、運行団体による要望書が提出された。市議会議員を前にねぶた師・竹浪比呂央氏の説明があった。「以前、小屋からラジカセが盗まれたことがあります。

中のカセットだけが残っていました。犯人の好みではなかったようで、そのカセットは、鳥羽一郎でした。」会場は大爆笑だったが、深刻な問題である。説明会の中では、北村麻子さんに続く二人目の女性ねぶた師のデビューが示唆された。

ねぶたの迫力。国内遠征などで、間近でご覧になった方もおられるに違いない。只、遠征の場合には大抵、中型ねぶた1台である。祭り本番には全22台の大型ねぶたが出陣して、市街地を席卷する。「北国の短い夏の夜空を焦がす」という常套フレーズは言い得て妙である。

伊藤一郎（文芸・S52・1977年度卒）

写真提供：青森ケーブルテレビ（株）

江古田支部の連絡先につきましては校友会事務局まで願います。（TEL.03-3554-5363）

どちらの江古田会も同じでしょうが、岩手江古田会も総会を開けないまま一年が過ぎた。今年こそとコロナ感染終了と会長鈴木は考えております。

さて、原稿に書く活動がない場合は「思い出の先生」を書きなさいとの依頼でありました。これは非常にたやすいことです。なぜならば日藝には、書くには困らない師が多くいらっしゃるからです。ただし、他学科・他コースの人には分からない閉じた世界の話になります。これから書くことを懐かしんでくださるのは、文芸学科でジャーナリズムを専攻したごく少数。

私の最初の師は二宮信親先生。読賣新聞の出版局長を務めたインテリでした。『夜と霧』のフランクフルに単独インタビューした時の話などを個人的に聞いたものでした。次に師事したのは、酒井幸雄先生。こちらも読賣新聞、政治部次長等を歴任した政治記者。政治の裏側、生々しいオフレコの話、等々今にして思えば貴重な昭和の政治を聴かせてもらいました。酒井師にはそれ以外に社会で生きる一流の作法も教えていただきましたが、長くなるので割愛。さらにサンデー毎日編集長を務めた岡本博先生にもお世話になりました。なぜお世話にかということ、「昼飯に行こう」と貧乏学生に声をかけてくださり、校門前の蕎麦屋でよくご馳走になったからです。そして最後に、大学4年間ばかりか、現在に至るまでご指導いただいているのが、山本雅男先生です。英語の授業を受けてからの付き合いですが、英語を越え、人生相談、就職相談、都内の道路案内等実に様々なことにかかわってくださった。我が師であることに甘え、私がかつて勤務した岩手の県立高校の課外授業に招いたこともあります。

招いたということで、写真を載せます。中央にいるのが不肖鈴木。右隣が現理事長・林真理子氏、その隣が綿矢りさ氏。私の左に、中瀬ゆかり氏、古市憲寿氏である。この人気者4人を私が務めていた高校にお招きし、生徒の前で講演をしていただきました。多分日本一豪華な講演会だったと思います。それも高校生限定で。次はこの紙上で、林理事長と対談できればと願っています。

（記 鈴木勝博）



マスク生活にすっかり慣れてしまった三年間。親しい仲間たちとはメールか電話、SNSで近況報告。そんな日々とはキッパリお別れして、ゆっくり盃を交わしたい今日この頃です。

新潟江古田会総会は三年間開催出来ない状態、本部とも交流出来ず、本当に残念に思っています。ボク自身は家族写真を中心としたポートレイトスタジオを経営しておりますが、少々苦戦を強いられています。そんな状況なので、県内の会員の活動状況につきましては詳しいことはつかめておりません。それでも、年に一人ぐらい卒業生のプロフィールを撮影させていただき旧交をあたためております。

僕が在学していた1970年代は大学紛争が少し落ち着き授業も順調に行われていました。写真学科生だったので昼間は撮影、夜は狭いアパートの押し入れ暗室でひたすらフィルム現像に励み、写真学科の暗室で紙焼きの毎日でした。

ゼミは渡辺義雄先生と木村恵一先生。日本の写真界の重鎮です。

僕の専攻はグラフィジャーリズム。世界を駆け巡るカメラマンになることが将来の目標でした。渡辺先生は僕と同じ新潟県の出身で、伊勢神宮や出雲大社など日本の貴重な文化財の撮影で有名。温厚で優しく丁寧な指導でした。木村先生はグラフィジャーリズムの第一人者で北朝鮮の現状や日本企業の最前線を撮影取材、自由で冒険的な作風を好まれました。

毎週の課題作品提出、批評、撮影指導に明け暮れましたので3年4年の学生生活は写真撮影と現像に勤しむ毎日でした。それでもお二人とも親身になってのご指導でしたので留年することなく無事卒業出来た事を感謝しています。

フィルム代、現像薬品代、カメラのレンズや備品の新調などで写真学科はかなりの資金が必要でした。

親からの仕送りだけではなかなか追いつかないので、アルバイトに励みながらの毎日。学生生活を謳歌する余裕はあまり無かったと記憶しています。1987年に卒業して13年現像所勤務。

現在は、ポートレイトスタジオを経営して36年になります。

赤ちゃん誕生から、七五三、入園入学、13参りに20歳の記念撮影。リクルート写真やお見合い写真、結婚写真や家族写真などなど、人生の節目写真を撮り続けています。

最近では地域密着ポートレート写真スタジオとして婚活や終活写真も多く撮影させていただいております。在学中に渡辺先生、木村先生から学んだ写真の貴重な記録性と重要性、そして、心に温もりと精神的な安らぎ感をもたらす写真撮影を大切に尊重しながらこれからも頑張ります。

増井伸一（写真・S48・1973年度卒）

長野江古田会は、コロナ禍で会議もオンライン開催だったり、なかなか実際に集まることができずにいました。新型コロナウイルス警戒レベルが少し下がるのを期待して、2022年7月24日に久しぶりにオンラインも併用しての総会を開催いたしました。ずいぶん長いこと理事をさせていただいているのにも関わらず、あまり参加ができなかったり、会員の皆様ともあまりお会いできずに来ていますが、「親睦の会」ということに乗じて、お許しいただいています。

総会は、夏の盛りといっても、困るほどの暑さではなく、田上校友会長にもお運びいただき、長野駅近くのアイビススクエアにて行われました。リアル参加者も、オンライン参加者も多くなかったのですが、しばらく休止していた活動（親睦の会）がいよいよ動き始めるかしら??と期待でき、江守会長の下、新たな年を刻むことに。なにせ、さまざまな学科出身者の集まりですので、何か持ち寄るにしても、楽しい! 気持ちしかないけれど…（なかなかまとまらない!?)

2013年8月29日にFacebookページを立ち上げて、長野江古田会の活動や交流会の情報や総会の情報など事務局からのお知らせと、会員同士で交流できる掲示板として使えるようにとして、当初は飲み会のお知らせなどされておりました。なかなか会のFacebookを覗きに行くことがなくいますが、…会自体が、OB会の親睦会的な機能でそれこそ素敵な関係ではないかしらと思うのです。きっと、県内にまだまだ日芸に関わりのある方がいらっやと思います。ぜひ、お仲間になって、交流させていただきたく存じます。社会に出てからのさまざまな繋がり、決して足かせになるものではなく、生活が豊かになる一つの資源（セイフティネット的な…）ではないかな、と思うのです。

皆さんそれぞれの日芸の想いがあり、思い出があり、懐かしい気持ちがあるかと思います。そんな気持ちを持ち寄って、お話できるといいな! と思います。

ぜひ、お声がけいただければ…よろしくお願いいたします。

（演劇学科 昭和60年度入学 小林美和）



総会後、役員と田上会長で。

愛知江古田会

■平成に華やかな設立総会が催されてから7年目…。コロナの影響により、3年ぶりとなる第5回愛知江古田会総会が、令和4年10月1日（土）名古屋市の名古屋観光ホテルで開かれ、来賓1名、会員23名の計24名が参加しました。

総会は、例年通り滞りなく終了し、その後、木村政司芸術学部長が御入場。学部長から祝辞やお土産を頂き、懇親会がスタートしました。

会場は、3密を防ぐ為、名古屋の夜景が眺望できる広い会場で、例年恒例のビュッフェ形式を廃止し、弁当に変更しました。3年ぶりの再会や懐かしい顔触れが揃い、会食をしながら、各会員の近況報告や新会員の挨拶を聞き、楽しいひと時を過ごしました。

今回は、荒川広一先輩（演劇S52年度卒）、西川長秀先輩（演劇S60年度卒）、大倉健作先輩（放送H8年度卒）、杉本桃子氏（放送R2年度卒）が初参加し、より一層若手&女性メンバーも増え続けています。

愛知江古田会の特徴である「平成」と「女性」二つのセイが順調に拡大し、今年度は、新たに「令和」卒業の新メンバーも参加し、「昭和」「平成」「令和」卒の日芸生が世代を超えて江古田の街や日芸の今と昔について歓談し、懐かしい母校の思い出話に花が咲き、時を忘れてしまう程でした。

愛知江古田会は、益々の発展を目指してメンバーを募集しております。東海地区在住の卒業生や東海地区に所縁のあるOB・OGの皆様の御参加をお待ち申し上げております。

お問い合わせは、藤田支部長（090-1783-5103）まで。

三富 由杏子（演劇H15年度卒）



宮崎江古田会

『竹井さん！まん防出ましたね、飲食店はどうですか。』

テレビで状況話してください。』

宮崎県には民放のテレビ局は2社しかない。この3年本当に数えきれないほど飲食店の現状を伝えるお役目を頂くことが出来た。

私は平成8年（1996年）放送学科卒である。卒業後は洋服の世界へ入り、そこで出会った主人の故郷、宮崎県へ移住した。生業は飲食業レストラン経営である。現在宮崎県内で7店舗。コロナで2店舗失ったが、お陰様でなんとか経営を続けることが出来ている。

放送学科在学中は報道ゼミ所属であったが、卒業後は報道関係には行かず、現在に至っている。しかし卒業後20年以上経って、ラジオヘレギュラーコメンテーター生出演したり、テレビへの生中継出演依頼を頂いたり、小学校～大学まで講演をする機会も出来た。不思議な事である。まるで在学中から将来ここでの勉強が役に立つことになるよと予言されていたようである。

報道ゼミの恩師、香原勝文先生には本当にお世話になった。先生亡き今も、ゼミのOBOG会は続いており、先生のご家族と懇意にさせて頂いている。有難い事である。

宮崎県へ移住した際に、誰も知り合いがいないうち、繋がりをもちたいと連絡を取ったのが、【宮崎江古田会】との出会いである。毎年10数名の参加者で集い、先輩たちの江古田話を聞けることは大変興味深く、嬉しいことであった。宮崎での商売の大応援団の皆様はここで感謝を申し上げたい。

残念ながらコロナ禍で、宮崎江古田会はまだ開催が出来ないが、今年あたりから出来るであろうか。先輩ばかりであるが、出来れば後輩たちの発掘に力を入れたい。

少数の特徴的な大学であったからこそ、その繋がりを次世代へ伝えていきたい。

我ら団塊ジュニア世代の使命であろう。宮崎にいる日大芸術学部出身者の方は、是非ご連絡頂きたい。

宮崎江古田会

会長 後藤 欣久

0985-77-1110

竹井 倫世（旧姓西野）拝



江古田支部の連絡先につきましては校友会事務局までお願いします。（TEL.03-3554-5363）

第17回 日藝賞

今年度第17回日藝賞に映画監督・脚本家の藤井道人さんが選ばれました。

日藝賞は、著しく日藝の名声を高めその業績が社会に貢献し芸術を志す学生に夢を与える人物に贈られます。選考対象は、中退者も含めかつて日藝に在籍していたことのある人すべて。活躍分野は一切問いません。在校生、教職員、校友会役員などによる投票を基に決定します。



藤井道人（映画：H20・2008年度卒）

PROFILE

1986年生まれ。東京都出身。日本大学芸術学部映画学科卒業。大学卒業後、2010年に映像集団「BABEL LABEL」を設立。伊坂幸太郎原作『オー！ファーザー』（2014年）でデビュー。以降『青の帰り道』（18年）、『ディアンドナイト』（19年）、『宇宙でいちばんあかるい屋根』（20年）、『ヤクザと家族 The Family』（21年）、など精力的に作品を発表。2019年に公開された『新聞記者』は日本アカデミー賞で最優秀賞3部門含む6部門受賞をはじめ、映画賞を多数受賞。

2022年にはNetflixオリジナルドラマ『新聞記者』で再び監督を務める。同年に公開された映画『余命10年』では興行的にも大ヒットするなど、常に時代性に合った話題作を生み続けている。2023年は映画『ヴィレージ』、『最後まで行く』の公開を控えている。

【主な作品】

●長編映画

『青の帰り道』（2018）、『ディアンドナイト』（2019）、『新聞記者』（2019）、『宇宙でいちばんあかるい屋根』（2020）、『ヤクザと家族』（2021）、『余命10年』（2022）、『ヴィレージ』（2023）、『最後まで行く』（2023）など。

●短編映画

『DIVOC-12『名もなき一篇・アンナ』（2021）、『MIRRORLIAR FILMS『名もなき一篇・東京モatorium』（2022）など。

●ドラマ

カンテレ/フジテレビ『アバランチ』（2021）、Netflix『新聞記者』（2022）、ABC/テレビ朝日『封刃師』（2022）、カンテレ/Netflix『インフォーマ』（2023）など。

●アニメーション

Netflix『攻殻機動隊 SAC_2045 持続可能戦争』（2021）

●MV

RADWIMPS『うるうびと』、millennium parade『FAMILIA』、宇野実彩子『最低な君にさっきフラれました』、清原果耶『今あの頃の僕ら』、amazarashi『未来になれなかったあの夜に』など。

●CM

資生堂 レシピスト『一緒にスキンケア』篇、MINE×NIVEA『本谷有希子の答とは』など。

第16回日藝賞受賞記念 中村至男展 2022

第16回日藝賞受賞記念講演会

第16回日藝賞にグラフィックデザイナー・中村至男さんが選ばれました。受賞を記念して、中村さんのこれまでの仕事と新作をよせた中村至男展2022と第16回日藝賞受賞記念講演会が開催されました。

第16回日藝賞受賞記念 中村至男展 2022

2022年11月3日（木・祝）～17日（木）まで芸術学部A&Dギャラリーにて



第16回日藝賞受賞記念講演会

2022年11月8日（火）A棟B101教室にて
日藝を卒業後、グラフィックデザインを中心に、広告、絵本、デジタルコンテンツなど幅広く活動を繰り広げている中村至男さんの貴重な交流となった。



中村至男 プロフィール

中村至男 Norio Nakamura
川崎市生まれ。1990年美術学科卒業、ソニー・ミュージックエンタテインメントを経て1997年よりフリーランス。

グラフィックデザインを中心に、広告、絵本、CI、デジタルコンテンツ、映像、イラストレーション、ブックデザインなどで活動。

著書に、絵本『どっこどうぶつえん』『はかせのふしぎなプール』『たなのうえひこうじょう』『ゆきだゆきだ』『サンタのコ』。『7:14』、『勝手に広告』（佐藤雅彦氏と共著）、『明和電機の広告デザイン』（土佐信道氏と共著）など。

主な仕事に、21_21 DESIGN SIGHT「単位展」、アートユニット「明和電機」のグラフィックデザイン、日本科学未来館、雑誌「広告批評」（1999年）、佐藤雅彦氏とのプロジェクトに、PlayStation ゲーム『I.Q.』、NHK みんなのうた『テトパッテンソン』など。

ポローニャ・ラガッツィ賞優秀賞、ニューヨークADC 銀賞、毎日デザイン賞、亀倉雄策賞、東京ADC 賞、東京TDC 賞など受賞。



状況に打ち克つ学びを！

映画学科主任
奥野 邦利

この4月より映画学科の主任を拝命しました奥野邦利と申します。映画学科は前任の齊藤裕人教授が14年半の長きにわたって重責を務められ、その大らかでありながらも的確な指導力によって、学科スタッフも安心して務めを果たすことができました。それは結果として学修環境を整え、学生たちのより良い学びにつながったと実感しています。私としては、齊藤先生より主任のバトンを預かる形となりましたが、これまでの学科運営をしっかりと継続しつつ、それと同時にコロナ禍を経て、加速化する社会の変化を捉え、よりスマートな学科運営を目指していきたいと考えているところで。

さて、思い返せば、令和2年の2月28日より、全国の小、中、高等学校の一斉休業が実施され、芸術学部でもそれに続く形で新年度からは全ての科目でオンライン授業となりました。その当時の私は学部の学務担当として、教務課員と共に授業に関わる各種方針の設計に携わりました。体験したことのない地球規模のパンデミックに対して、情報も錯綜し、どのように物事を運ぶべきか思案に余る日々でした。何が最善であったのか、今でも答えはなく、アンケートの回答からは見えてこない学生たちの気持ちや、慣れないオンライン授業に取り組まれた先生方のことを想像すると、忸怩たる思いと重ねて感謝の思いを新たにしております。

ここで改めて自己紹介をいたしますと、私は平成元年に映画学科映像コース（現



映像表現・理論コース）に入学しました。この年は今では学生たちが通学していない所沢キャンパス開設1年目で、入学案内には現在の社会通念では有り得ないほど小さなスペースに1、2年生は所沢へ通学することが記されていました。当時の映画学科では授業開始前に、軽井沢の研修所で2泊3日のオリエンテーションキャンプが実施されており、その行きがけにまだ工事中のキャンパスを見学した時には、初めて言葉を交わす同期生たちと驚愕したのを覚えています。その頃の映像コースでは、業務用ビデオや35ミリのリバーサルフィルムを使用したマルチスクリーンでの研究及び制作が中心のカリキュラムにあって、元来から映画好きだった私にはビデオでのドラマ作りに興味が持てずにおりました。そ

んな折、今日でも益々活躍されているアーティストの中谷芙二子先生の授業で紹介されたビデオアートに興味を持ち、結果としてそれを専門として今に続いておりまして、映画学科としては変わり種の主任かもしれません。

コロナウイルス感染症 2019 もようやく収束を迎えつつあり、映画学科でもほとんどの科目で対面授業を実現できる運びとなりました。新入生はもとより、多くの学生たちも希望を持って新年度を迎えております。一方で、コロナ禍にあって、生活様式の変化と共に、若者の考え方やあり方に変化が生じているのも実感されている通りです。映画・映像の世界でも、これまでとは異なる状況の変化は顕著です。Netflix や Amazon プライムを典型とするような動画配信サービスの国内市場規模は5000億円を超え、映画興行収入の2倍をはるかに超えています。それは市場や流通だけの話ではなく、制作においても具体的な変革が起こっていることを証明しており、卒業生の皆さんの多くが当にこの状況の只中におられることと存じます。実は学生の就職先も、以前とは異なる業種で映像的な企画や発想を求められる場面が増えてきた様子が窺われます。その意味でも、卒業生の皆様から多くの知恵と機会が寄せられることを希望しておりますと共に、95年目を迎えた映画学科をどうぞよろしくお願いいたします。

音楽学科の今、そして未来

音楽学科主任
伊藤 弘之

私は2002年度より音楽学科の非常勤講師として、2010年度からは専任教員として日本大学芸術学部勤務してまいりました。私自身は日本大学出身ではないのですが、すでに20年以上の時間を教員として日芸で過ごしてきており、日々、感謝と大学への愛情を感じながら奉職しております。大人数を対象とした授業もいろいろと担当してきておりますから、この文章をお読みの皆様の中にも、授業などを通して私と接点があった人たちがいらっしゃるかもしれません。

よく言われる少子化による受験生人口の減少に加え、子供たちがたくさんの習い事を抱え音楽はその一部に過ぎなくなっていること、仮に何かの楽器を学んだとしても専門的に極めようという子供たちが昔に比べかなり少なくなっていること、インターネットの目覚ましい進化と普及拡大に伴い若者たちの音楽そのものに対する感覚が大きく変化してきていることなどもあり、音楽学科を取り巻く環境は近年随分変化してきました。そのような状況の変化に対応するべく、音楽学科の教職員が一丸となって様々な創意工夫を重ねながら、音楽学科の更なる発展のために、日々、努力しております。そんな中、現代のテクノロジーを活かした内容を教育の中心に据えた情報音楽コースは、近年非常に多くの受験生を集め、エンターテインメント系を含む多方面で活躍する優秀な人材を数多く排出しています。もちろん、クラシック系のピアノコース、声楽コース、弦管打楽



コース、音楽教育コース、そして私が担当している作曲理論コースも、それぞれのやり方で、全力で、より魅力的なコース作りと運営に取り組んでいます。従来から日芸は全体的に就職に強い傾向がありますが、近年、音楽学科の在学生たちもかなり早い段階から卒業後のことを考え始め、インターンシップを含む様々な就活に積極的に取り組むようになってきています。また、演奏などのコンクールにチャレンジし優れた成績をおさめる学生や卒業生も出てきています。

日芸の「他学科公開授業」はかねてから学生たちから人気の制度で、この制度に魅力を感じて日芸を目指してくる受験生も多いと常日頃感じております。音楽学科の学生たちも頻繁に他学科公開科目を履修

し視野を広げてきましたし、音楽学科でも従来からいくつかの授業を他学科公開としてきましたが、それらはどれも講義系かつ大人数の授業でした。もちろんそれだけでも意義はたいへん大きなものなのですが、現行のカリキュラムでは新たに「音楽共同制作」という学科の垣根を超えた「非講義型」の、中規模の人数を対象とした授業を展開しはじめています。この授業は「表現技術部門」というくりの中の、映画学科限定の他学科公開授業なのですが、学生たちが一方的に講義を聞くのではなく、音楽学科の学生が音楽を担当し、映画学科の学生が映像を担当し、共同で作品を作り上げるという異なる領域間のコラボレーションを行います。日芸にしかできない路線の授業と言えるでしょう。また、「音楽キャリア論」「音楽マネジメント」などといった時代のニーズに合わせた授業もオファーし始めており、早い時期から音楽を活かした将来について真剣に考え始めることを学生たちに促す機会になっています。

従来から行ってきたクラシック音楽の教育を丁寧に行うことに加え、新しい時代のニーズにマッチしたコンテンツを積極的に取り入れながら、音楽学科自身も今、未来に向かって進化していこうとしています。この度、音楽学科主任を拝命し、着実に一歩ずつ前進していけるよう学科を取りまとめながら、精一杯頑張りたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

文字文化のライバルは、 そこにいる。

文芸学科主任
青木 敬士

2023年4月より文芸学科主任を務めることになりました青木敬士です。僕は平成元年の所沢校舎開校時の一期生でした。先輩のいない、1年生だけの広大なキャンパスを体験したのは僕の同世代だけだと思います。それから30年以上の時を経て、文芸学科で教える側の顔になるうとは、所沢キャンパスでまだ石畳も敷ききれっていない学食前の地面に渡された板を踏みながら、混みあう学食に通っていた頃には1ミリもイメージしていなかったことでした。卒業後、書店員、DTPオペレータ、某果物の名前がついたコンピュータ会社のサポートセンターなど、さまざまな職を経験しているさなかに、学部の恩師から「これからの文芸学科で、デジタル技術を用いた本づくりを教えられる人材を求めている」と声がかかり、助手試験を受けることになったのが、現職に至るきっかけです。ちょうど世紀をまたぐ頃だったと思います。

その先の21世紀、現在に至る怒涛の変革期を語るのに「メディア論」のマーシャル・マクルーハンの言葉を借りましょう。「まず我々が道具を作り、やがては道具が我々を作り始める」1998年頃から普及が本格化したインターネットは、通信速度と通信料金の限界から、初期は掲示板やテキストサイトが花開く場でした。その後、定額常時接続が一般化すると同時にYouTubeやニコニコ動画が隆盛を誇り、SNSと渾然一体となったコミュニケーション環境がデジタル・ネイチャーを構築し



ていきます。携帯電話を「通話」のために使う機会は激減し、誰もがLINEやTwitterなど「文字」によるやりとりを主流にしています。文芸学科が包括する「テキスト文化、本の文化」のライバルは、かつては映像文化だと思われていたかもしれませんが、いまやライバルはテキスト文化そのものの内にあり、テキストを収める「器」は、うつろいゆく小さな画面上に主戦場を移しているようにも感じられます。さらに今年になって、ChatGPTをはじめとする対話生成可能なAIの登場にクリエイター界は激しく揺さぶられています。それを必要以上に恐れ排斥する必要はない、と、僕は新入生ガイダンスで話しました。こんなふうに……

AIが行っているのは学習の中から特徴

量を抜き出すことで、いままで人類が描いてきたものから美のルールを見つかるのが得意なだけです。ならば新しいルール・枠組みを作ってしまう方がいい。ひとつヒントとして、最新とは真逆の古典を引いてみましょう「千夜一夜物語」をご存知ですか？「アラジンと魔法のランプ」「シンドバッド」「アリババと40人の盗賊」などを思い浮かべる方が多いかと思います。しかし、じつはそれらの話は原典にはない。これは「千夜一夜物語」自体が「新たな物語を取り込めるフォーマット」として優れていることの証拠でもあります。

妻の不貞に怒ったシャフリヤール王が女性不審に陥り、街から生娘を娶っては一晚遊んで殺してしまうようになるのが千夜一夜の冒頭です。大臣の娘シェヘラザードは王の愚行をやめさせるため王に嫁ぎ、夜の床で興味深い話を王に語ってみせます。そして「明日のお話は、今宵のものより、もっと心躍りましょう」と口をつぐむと、王は続きを聴きたくなり、シェヘラザードを生かし続けて1000日、ついに改心することになります。シェヘラザードが持つ「動機」と、話が興味を引けなければ殺されるかもしれない「緊張感」は、AIにはまだ実装されていない、クリエイターの専有物です。日芸で、このアドバンテージを胸に秘めて変化する世界にあなただけが知る変化を加えてください。と。

伝統と自己革新——演劇学科

演劇学科主任
奥山 緑

はじめまして。このたび演劇学科の主任を拝命しました奥山緑です。卒業生でも男性でもない主任は演劇学科では初めてかもしれませんが、2001年から20年近く非常勤講師を務め、その後専任となり、気がつけば人生でもっとも長く関わった組織が日芸演劇学科となりました。みずからの出身校より、ずっと身近に感じています。

演劇学科は、現在4コース10専攻をもつ1年から4年まで500人強の学部生が在籍する大所帯です。4コース10専攻は、舞台構想コース（劇作、演出、舞台監督、音響、企画制作の5専攻）、演技コース（演技専攻）、舞台美術コース（舞台美術、照明の2専攻）、舞踊コース（日舞、洋舞の2専攻）の構成で、演劇や舞踊のあらゆる側面を、学問としての魅力から、現場の知の入口まで、多面的に学べるカリキュラムを提供しています。

日芸演劇学科の強みは「どんなカリキュラムがいま一番必要なのか?」ということを教員の間で本当によく話しあっていることだと考えます。今年度からは原則対面授業に戻り、学びの活性化にさらに期待が高まります。

自己紹介をしますと、学生時代に文学座の研究所で3年間演技の勉強をし、本公演などに出演、先輩女優太地喜和子さんの付人を経験し、卒業後は銀座セゾン劇場に勤務、さまざまな演劇公演のプロデュースを担当しました。仕事を終えると客席の後ろに座って毎日のように見ておりましたので、おそらく日本で一番多くピーター・ブルックの芝居を見た人間だと思います。つかこうへい氏には芝居作りの「心」というようなものを教えて頂きました。そ



の後は舞踏カンパニー山海塾の制作、神奈川芸術文化財団では10年間200回以上公演を重ねたベッドで寝ながらお話を聞く芝居『親指こごう』のプロデュース、世田谷パブリックシアターではゼネラルプロデューサーとして野村萬斎芸術監督にお仕えし、伝統演劇の世界の扉を開いて頂きました。彩の国さいたま芸術劇場にて蜷川幸雄氏が演出する予定だった「1万人のゴールドシアター」のプロデュース、フランスにおける日本文化紹介「ジャポニスム」の現代演劇部門のコーディネイト、私淑する演劇評論家 渡辺保先生の助手として古典舞踊勉強会に参加…など、ややジャンルを越え過ぎですが、興味の赴くまま舞台芸術に関わってきたことは、広い間口を提供しなければいけない現在の仕事の礎となってくれています。コロニア大学 Teachers College の Arts Administration

修士課程で学んだこともいまカリキュラム編成を考える上で直接役に立っています。

しかし個人の教員としては何年授業をしても、毎回の授業が学生にとって「120%エキサイティングであるか」は、芸術作品の創作同様、高みを目指すに果てない仕事だと感じられ、祈るような気持ちで、授業準備に取り組んでいます。

演劇学科のこれからば「伝統と自己革新」という言葉で表したいと考えます。演劇学科の伝統に最大の敬意を払いつつ、これからの日本の、さらには世界の舞台芸術界を背負っていく若者の学びに最適なカリキュラムを更新しつづけていくことを目標としています。幸い、現在の演劇学科は、日本の演劇界やアカデミックな世界での活躍が期待される、将来が楽しみな素晴らしい先生方に恵まれております。同僚の先生たちと一緒に、最高のカリキュラムを目指してまいりますので、どうぞご支援下さい。

卒業生の皆様には、コロナ禍で新卒採用が難しかった数年がやっと終わりを告げそうな今、ここ数年分を取り戻せそうです、近年卒業した学生たち、これから卒業する学生を引っ張って下さいようお願い申し上げます。ご存じのように、日芸の学生は、素直でやる気にあふれた、人に対する深い思いやりに満ちた優しい子ばかりです。彼女ら彼らの活躍にご期待下さい！



演劇学科科特設HP

堀越千晴 (写真)

「どうしてもこの試合が撮りたい、ポートフォリオに入りたいんです」

高校3年の夏、担任にこう言って5時限目から登校したことがありました。

時効わかりませんが、当時通っていた塾を着信拒否し、高校3年の夏はカメラを担いで球場に通っていた時期もありました。母が聞いたら相当怒るでしょう。そして、受験では「写真記者になりたい」と答え日芸に入学しました。大学での大きな変化は、素直に質問するようになったことでした。「なんでそんなに語彙力があるんですか」コロナ禍になり、対面で会う機会の少なかった教授の写真展に行った際に聞きました。教授からは「本をいつも三冊持ち歩きなさい」と言われ、その足で本屋に飛び込み、2年経つ今も実践しています。先生、私はあの頃から成長できたでしょうか。

この春から、写真記者になります。自分の視野を広げてくださった教授と愉快な友人、過去の自分に恥じない働きをしたいです。



鵜野亜梨沙 (美術)

入学したばかりの時、美術・芸術のことは何もわかりませんでした。周りの同級生に合わせて淡々と授業をこなし、ただ頑張ることしかできませんでした。そのため美術・芸術について考えることも放棄していたように思えます。しかし、日芸で学んだ4年間、実習の授業では「技術と精神力の関係性」を、講評や鑑賞では「芸術を見定める視点」を、様々な角度から美術・芸術に関わる力を高めていけたと確信しています。そんな多くの経験は、自分の芸術に対する考え方を固めていくことにつながりました。まだ芸術という世界に入り込んで行けるのかわかりませんが、芸術の道を日芸からスタートできたことは、さらに自分の道を広げていくことに繋がったと思います。これも先生や切磋琢磨できる友達に会えたことが大きいと感じています。卒業してからも4年間の学びを最大限に活かし、この道を選んで良かったと心から言えるよう、これからも精一杯頑張っていきます。



下村乃亮 (映画)

私は父の影響で物心つく前からたくさんの映画を見てきました。私が5歳の頃、私は1本の映画と出会いました。『となりのトトロ』です。今思えば、この映画との出会いが私の人生の最大のターニングポイントでした。幼稚園から帰宅すると、テーブをビデオデッキにセットし、テレビを点けます。テーブが擦り切れる程、毎日、繰り返し再生していました。私はこの映画と出会い将来は映画に携わる仕事がしたいと強く思いました。そして、満を持して日本大学芸術学部の映画学科に入学しました。今まで見たことのない映画と出会い、映画に関する様々な知識を学びました。そして、自身で作品を作り上げていくことの楽しさ、大変さを実感しました。大好きな映画と触れ合える素晴らしい4年間だったと感じます。そんな私ですが卒業後は広告業界に進みます。卒業後も大学での学びと経験を遺憾なく発揮し日々精進していこうと思います。



藤井健 (音楽)

「レコード会社に入って音楽で感動を届けたい」

小学生の時、卒業文集に書いた私の夢です。

あれから10年が経過した今、夢見た職業に就くことができています。

思えば、日藝での大学生活には沢山の夢が転がっていたなと思います。

在学中は目の前のことをこなすのに必死で気付きませんでした。一言では語れないほど、色々な事を学ばせていただきました。コロナ禍で思うように行かない事も少なくありませんでした。大きな失敗もありました。

広島田舎で育った僕が、様々な壁を乗り越えてこの世界に飛び込む事が出来たのは、間違いなく日藝のお陰です。

本当に日藝でよかった。先生方には感謝してもしきれません。今度は、いつかの自分の様に、どこかのちびっこ達を感動させられるよう。夢を持ってもらえるよう。

裏方ではありますが、エンターテインメントを支えていけるよう、精進していきます。

若輩者ですが、どうかご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。



吉野萌（文芸）



「吉野は日芸でも、ほかの大学でもきっと浮くよ」

私が自分の個性について悩んでいたときに友人から言われた言葉です。悪口ではありません。

私は日芸生にしては真面目で、一般的な大学生に近い感性を持っています。でも、一般的な大学生には無い変な部分もたくさんあります。結果として日芸では普通すぎて浮き、きっとほかの大学では変人として浮きます。

そうやって考えたときに、「日芸の中で相対的に普通であること」が、私の日芸生としての個性なんだと思うことが出来ました。

そんな普通な私ですが、日芸祭を運営したり、江古田文学に寄稿したり、特待生になったりと在学中は変わった経験を得ることが出来ました。これらの経験から来るご縁で、今回この文章を書かせていただけています。

春からは出版社に入社します。上手くやっていけるかとても不安です。でも、日芸での経験を糧に「社会人としての個性」を見つけつつ、頑張っていきます。

森山詩苑（演劇）



入学してすぐの頃、「ただいまを言いたくなる場所が、私にとっての故郷（ふるさと）です」というプレゼンをしました。この4年間で、江古田は故郷になりました。

日芸を受験する際、「3つのEnnをモットーに」というキャッチコピーをつけました。出逢いとつながりの縁、学問や芸術の集う場所という意を持つ、人やものをつなぐ苑、広がり続ける演劇の演。「えん」という響きを気に入って、後付けのようにつけたはずの3つの言葉は、友人たちや先生方との縁、江古田の街やキャンパス、中ホールという苑、4年間の学び、これからの私の強みになるかもしれない演、と私の大学生活を表す言葉になりました。

気づけば、たくさんの伏線を回収した学生生活だったのかもしれない。出逢ったすべてのあなたへ感謝します。

卒業後は、岡山市の劇場に勤めます。新しい香りのする劇場で、文化芸術と地域について考えていきたいです。

故郷・江古田と、笑顔で「ただいま」と会える日まで。

森岡巴渚（放送）



初めまして。放送学科でテレビ制作を専攻しておりました、森岡巴渚と申します。

日芸で過ごした4年を振り返ると…「ほぼコロナ」でした。

ちゃんと大学に通えたのは約1年間だけで、オンライン授業ばかり…入学した時に、まさかこんなことになるとは思っていませんでした。

——と、ここまではマイナスオーラ全開ですが、正直コロナ禍でも十分充実していました。面白おかしい刺激的な友達はもちろん、チャンスの場を与えて下さる恩師にも出会うことが出来ました。日芸の売りは「人」と言っても過言ではないほど、素敵なお縁で溢れていたのです。学校へ行く機会が少なかったからこそ、有意義に過ごせた時間もありました。

4月からは新社会人としてテレビ局で働きます。不思議なお縁を大切にしながら、目の前のことをコツコツ頑張りたいと思っています。

4年間、ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いいたします。

石川あん菜（デザイン）



入学してから様々の分野のデザインに触れた上で、自分の分野を定め自ら学んでいく日芸の授業はとても充実していました。1年次に幅広いデザインに触れたことで、より自信を持って現在先行している建築の分野に進むことができました。

また、在学中は海外のデザインや芸術に対しても興味湧きヨーロッパ研修に参加しました。約1ヶ月をかけ、オランダ、パチカン、イタリア、スペイン、フランスの5カ国を回り芸術的な面だけでなく、文化を肌で感じ、添乗員の方の説明が丁寧で内面的な面でも理解を深めることのできる研修でした。また、街に飾られているポスターや、店に売られているプロダクト、建築を見ることでそれぞれの国のカラーや生活が見えてくることもとても興味深かったです。

日芸で過ごした4年間の学習や経験をわすれずにこれからも新たな目標に向かって前進し続けたいと思います。



写真学科

■日本大学芸術学部写真学科リカレント教室企画

「日藝 大人の写真塾」江古田校舎にて開催

7月3日に「銀塩（フィルム）写真コース」（田中里実、西垣仁美）「デジタル写真コース」（服部一人、秋元貴美子）を実施しました。さらに秋には、服部一人教授が「究極のアナログ写真！超大型カメラ8×10（パイテン）で写真を撮ってみよう」（11/19、11/26、12/3）、秋元貴美子教授が「超絶初心者向け！デジタルカメラ写真教室」（11/19、11/26、12/4）、田中里実教授が「写真の起源を体験しよう 19世紀写真技法 鶏卵紙の制作」（11/26、12/3、12/10）西垣仁美教授が「はてな？で始まる写真論」（11/19、11/26、12/3）を実施しました。

■日本大学芸術学部写真学科教員作品展「SKY V」開催

12月2日～12月15日にソニーイメージングギャラリー銀座で「SKY V」を開催しました。出品者は鈴木麻弓准教授、穴吹有希准教授、八木元春助教でした。

■服部一人（教授）今日写真展「6×6 Portraits B&W+Color」開催

8月28日～9月5日に南青山のギャラリーストックスで、アジア・アフリカで撮影したポートレートによる個展を開催されました。



■鈴木麻弓（准教授）個展「豊穣」開催

2月18日～3月25日に西麻布のKANA KAWANISHI PHOTOGRAPHYで、京都グラフィック2022において「10/10現代日本女性写真家たちの祝祭」にも選出された作品「豊穣」を再構成しての展示でした。



■写真展 八木元春（助教）「除夜の白」開催

2月23日～3月1日に四谷のポートレートギャラリーで、故郷の大晦日に行われる行事「七所詣り」取材した白黒写真による個展を開催されました。



■藤原恒平（助手）個展「Trace of humanity」開催

2月26日～3月11日に上野のDUGalleryで、人間が滅亡した後の世界を想像して制作した白黒写真による個展を開催されました。



■西垣仁美（教授）がCP+2023で特別講演

横浜パシフィコで開催されたCP+2023において3月23日に主催者企画による「写真の今、そしてこれから。」を多彩な写真を見せながら講演されました。

■写真学科公式ホームページ/Twitter

写真学科の直近情報は下記をご覧ください。

公式HP <https://www.nuaphoto.com>

公式Twitter @Nichigei_photo



映画学科

■令和4年度映画学科各賞が、次の卒業生の論文・計画・制作に授与されました。

☆第50回渡辺俊平記念賞（映像表現・理論）船田真由

☆第25回筈見有弘賞（映像表現・理論）嶋田 萌

☆第16回大竹徹賞（映像表現・理論）若杉菜南

☆第17回八木信忠賞（録音）土手柚希

☆第47回映画学科奨励賞（映像表現・理論）藤原美嶺、鎌田麗音、佐野優一、（監督）高田恭輔、（撮影）福山頌悟、（録音）竹内千乃、（演技）杉尾香林

☆第32回映画学科選奨（映像表現・理論）佐々木悠佳、赤城悠加、戸井田くるみ、（監督）水原 誠、（撮影）劉 岩群、（録音）具志堅夏穂、（演技）福田里菜

☆第30回映画学科特別賞（伊藤忠ケーブルシステム株式会社提供）（映像表現・理論）田崎優歌、長谷川諒、佐藤妃夏、（監督）代田龍之介、（撮影）市川雄一、（録音）日本ソマ、（演技）松尾友太

☆第20回アートライティング賞（東芝ライテック株式会社提供）（撮影）三浦果萌〔照明にたいして〕

☆第22回映画学科コダック賞（コダックジャパン提供）（監督）黒田晴斗、宮川彰太郎、（撮影）伊東佳純、加藤さくら、（録音）入鹿山莉奈、川口千尋、（演技）米田昂右、天野航征

☆第8回三善賞〔（株）三善提供〕（演技）仁科かりん

☆第18回江戸クリエート賞〔（株）江戸クリエート提供〕（今年度より卒業生が対象となりました）（監督）笠原和真、吉田夢唯

■令和4年度をもちまして、次の先生が映画学科を退職されます。映画学科発展にご尽力いただきありがとうございました。（敬称略）

・学部：とちぎあきら、成田裕一、洲上拳、渡部実、鷲谷花、漆澤その子、占部信太郎

■令和5年度より、次の先生が新しく映画学科の講座を担当します。（敬称略）

・学部：常石史子（映画特別講義）、中島美緒（映画技術）、野地朱眞（CGI演習）、長門洋平（映画特別講義）、日比野美甫（洋舞）



美術学科

■例年3月に開催されていた「卒業博覧会」に合わせて行っていた卒業制作展でしたが、本年度より「美術学科卒業・修了作品展」と題し、1月に行うことになりました。



東京五美術大学連合の一つとして属している本学美術学科は、他の大学が行う、学内での卒業展シーズンに合わせて変更したことになります。関東近郊はもとより、地方から美大を目指す学生やアートファンの集客を念頭に入れ、学科に所属する学生の集大成である作品を充実した形で見せることが目的となっております。



会期は1月を3つのシーズン分け、1期を大学院絵画・版画領域の修了作品展、2期を絵画専攻・版画専攻の学部卒業制作展に、3期を彫刻領域の大学院修了展、学部卒業制作展の合同展としました。各領域・専攻において期間を分けることで、十分な展示場所を確保することで、学生一人が複数点作品を展示できるようにしました。また、今年度より、卒業・修了作品展とすることで、合同の広報物が必要となり、学生主体となった広報チームを立ち上げ、デザインや広報の方法などを検討しました。本年度は、学部4年生・絵画専攻の高崎晏津（タカサキアツ）が担当し、ポスターDM、バナーなどを作成していただきました。



音楽学科

●令和4年度 卒業論文要旨発表会 オンデマンドにて卒業論文が優秀であった学生による卒業論文要旨発表会が開催されました。〈音楽教育コース〉平光真於子、児玉彩華、長谷川理子〈情報音楽コース〉幾田りら（選出されましたが都合により発表いたしませんでした）、森尾拓斗、有野亘人、藤井舞雪（選出されましたが都合により発表いたしませんでした）

●令和4年度 卒業演奏会 2023年3月16日（木）北とぴあ・つつじホールに於いて、卒業演奏及び卒業作品が優秀であった学生の出演する卒業演奏会が開催されました。〈作曲コース〉上田侑輝（作品発表）、新田汐音（作品発表）〈声楽コース〉上坂らん（メゾソプラノ）、竹野花鈴（ソプラノ）、上野富紀翁（バリトン）〈ピアノコース〉柏葉実、吉田楽々、杉山和歌子、山口沙貴、大野寿乙〈弦管打楽コース〉浅沼花音（チェロ）、新井麻雅（フルート）、小野那子（ヴァイオリン）、片野歩唯（フルート） ※下記の卒業生は本演奏会に選出されましたが、編成の都合により演奏いたしませんでした。〈作曲コース〉久保田草太（作品発表）

●令和4年度 大学院修了演奏会 2023年3月1日（水）ゆめりあホールに於いて、修了演奏、及び修士論文が優秀であった修了生の出演する修了演奏会、修士論文要旨発表会が開催されました。〈情報音楽分野〉坂口菜々穂（論文要旨発表）、〈声楽分野〉矢部もも香（メゾソプラノ）、増子菜月（ソプラノ）〈器楽分野〉福角陸（フルート） 下記の修了生は本演奏会に選出されましたが、編成の都合により演奏いたしませんでした。〈作曲分野〉根岸宏輔（作品発表）

●日本ピアノ調律師協会主催 第24回新人演奏会 2023年5月1日（月）東京文化会館・小ホール ピアノ独奏 大野寿乙

●ヤマハ管楽器新人演奏会 2023年6月14日（水）ヤマハホール第40回クラリネット部門 クラリネット独奏 山本愛莉

●第20回サクソフーン新人演奏会 2023年4月22日（土）管楽器専門店ダクコンサートホール「スペースDo」サクソフーン独奏 海野日奈子

●令和4年度で退職なさった先生は次の通りです。ありがとうございました。片桐文子、河合明、佐藤一昭、渚智佳、西山健一、西山真二、増野亜子、南田勝也（敬称略）

●今年度より次の先生が新たに講座を担当しております。

大概秀一、岡本伸介、奥山隆司、河副圭子、河村幹子、清水是、菅沼希望、鈴木良枝、高木綾子、田代万里生、田村亜美、中西宜人、西村悟、日野悠平、渡辺裕紀子（敬称略）



文芸学科

■ロケット商会さんが『勇者刑に処す』で「このライトノベルがすごい！2023」単行本・ノベルズ部門新作1位にランクイン

文芸学科、青木ゼミを卒業されたロケット商会さんが『勇者刑に処す 懲罰勇者9004隊刑務記録』で「このライトノベルがすごい！2023」(宝島社刊) 単行本・ノベルズ部門(新作) 1位、単行本・ノベルズ部門3位、総合新作部門5位にランクインされました。

■卒業生の脚本家・吉田恵里香さん2024年度のNHK連続テレビ小説『虎に翼』脚本に決定

前回「向田邦子賞」の受賞をお伝えした吉田恵里香さんが、2024年度前期放映予定のNHK連続テレビ小説『虎に翼』の脚本を担当されることが発表されました。

■卒業生の岡田 遥さんが「妖怪の遺書、あつめてます」を刊行
卒業生の岡田遥さんがメディアワークス文庫より「妖怪の遺書、あつめてます」を2023年1月25日に刊行されました。

■佐藤諒翼さんの詩作品が、『詩と思想』2023年1・2月号にて最優秀作品に選出

卒業生の佐藤 諒翼さん(ペンネーム・nostalghiaさん)の詩作品「ぶろばがんだ」が、『詩と思想』2023年1月号、2月号(土曜美術社出版販売)にて最優秀作品に選出されました。

■「第三十三回伊藤園お〜いお茶新俳句大賞」にて、文芸学科生が多数入賞

「第三十三回伊藤園お〜いお茶新俳句大賞」にて、194万6459句の中から宇野有輝恵さん(文芸4年)が、「あらゆる子から逃げきった蜻蛉かな」で一般の部A(40歳未満)優秀賞を受賞いたしました！

また、酒井想さん(文芸2年)、園田祥馬さん(文芸2年)、金井百香さん(文芸4年)、日比谷清史さん(文芸4年)が佳作特別賞、岡野海斗さん(文芸2年)、堀内壘さん(文芸4年)、小野寺隆征さん(文芸4年)、瀧田智華さん(文芸4年)、橋本あゆりさん(文芸4年)、中山莉美さん(文芸学専攻前期課程1年)が佳作を受賞いたしました。なお、本学科が「優秀学校賞」に選出されています。



演劇学科

■退任新任のお知らせ

演劇学科の発展にご尽力された藤崎周平先生 尾崎弘征先生が3月31日をもって専任教員を御退任されました。本当にお疲れ様でした。お二人にはこれからも学部及び大学院の授業をご担当頂きます。そして4月1日より2名の専任教員が加わりました。

新任教授：舞踊家 松永雅彦



主要創作作品(演出 構成 振付/松永雅彦)

- ・対話ーそれは心のパズルー
東京新聞社主催
全国舞踊コンクール創作部門第1位
- ・Harmonizationー言葉のあしあとー
都民芸術フェスティバル参加作品
めぐろパーシモンホール 大ホール
- ・Harmonizationー習慣からの脱却ー
NBAバレエ団にて振付 新国立劇場他

新任助教：舞台音響家 今井春日



主要創作作品

- ・「ボルノグラフィ」(音響デザイン)
サイモン・スティーブンス 作
桐山知也 演出
- ・「春のめざめ」(音響オペレート)
フランク・ヴェデキント 作
白井晃 演出
- ・「パンドラの鐘」(音響オペレート)
野田秀樹 作 / 杉原邦生 演出

■演劇学科関係者 各賞受賞

第79回 全国舞踊コンクール 現代舞踊 第一部
第1位 鈴木泰羽(洋舞コース卒業生)

令和5年 各流派合同新春舞踊大会
文部科学大臣賞 花柳絵美舞也(日舞コース卒業生)

第30回 読売演劇大賞
最優秀作品賞「生き残った子孫たちへ 戦争六篇」
舞台美術：長田佳代子

伊東あおい(舞台美術コース美術専攻4年)

優秀作品賞「ライカムで待っとく」
演 出：田中麻衣子(演出コース卒業生)

優秀演出家賞 稲葉賀恵(演劇学科非常勤講師)

みなさん、おめでとうございます！



放 送 学 科

■八王子ShortFilm映画祭にて学生部門グランプリ他各賞受賞

放送学科の学生5名（米一碧海さん、石原遼太郎さん、水谷胡斗実さん、羽賀希美さん、黒澤大輝さん。すべて4年生）が共同制作した映像作品『自由研究』が「八王子ShortFilm映画祭 学生部門」において「グランプリ」「観客賞」「八王子日本閣賞」の3冠に輝きました。

■卒業生・川内有緒さんが本屋大賞ノンフィクション部門大賞受賞

川内有緒さんの『目の見えない白鳥さんとアートを見に行く』が「2022年 Yahoo!ニュース | 本屋大賞 ノンフィクション本大賞」にて大賞を受賞しました。また、同じく放送学科卒業生・三好大輔さんと川内さんが共同監督をつとめたドキュメンタリー映画も制作され、2022年秋より各地で公開されました。

■HBC(北海道放送)「今日ドッキリ！」で放送学科が紹介されました

2022年12月26日(月)にHBC(北海道放送)の情報番組『今日ドッキリ!』の「局内で発見された2インチのVTRテープを再生する」というコーナーで、現在国内では放送学科にしかない稼働可能なVTR再生機によって、貴重な2インチテープが無事に再生される模様が放送されました。この2インチVTR再生機はかつて実習で使われていました。現在日本国内で所持しているのは放送学科だけ、という貴重な機材です。

■新任教員のお知らせ

今年度より放送学科の専任教員として小林偉先生(昭和61年度放送学科卒)、澤田顕一先生(平成21年度放送学科卒)をお迎えしました。小林先生は放送作家として番組の企画・構成に長く携わられました。今年公開されたドキュメンタリー映画『ただいま、つなかん』でも構成を担当されています。平成23年4月から非常勤講師として「スポーツ番組研究(現「放送作品研究Ⅱ」)」を担当して頂いております。「ゼミナール」を中心に番組制作に関する授業を担当します。

澤田先生は本学科を卒業後、共同テレビジョンに入社され、音声ミキサーとして『MUSIC FAIR』などの音楽番組を担当されていました。「音響技術」を中心に授業を担当します。

■退職者のお知らせ

2005年～2017年まで学部長を務められ、2020年の学部退職後は大学院の講座を担当されていました、野田慶人先生が退職されました。野田先生、長い間本当にお疲れさまでした。これからもどうぞお元気でいらしてください。



デ ザ イ ン 学 科

■デザイン学科池田光宏教授とデザイン学科3年ショウシンインさんが東京TDC2023にて入選しました。

東京TDC(タイポディレクターズ・クラブ)は、文字の視覚表現と、視覚コミュニケーションのさらなる研究・研鑽を目的に、1987年に設立されました。この団体が主催する2023年の東京TDC賞にて、国内外より3679作品のご応募の中、池田光宏教授の作品「Bluemoment/みかんの眺め」と、ショウシンインさんの作品「時代の声」が入選しました。受賞作品は本年発行の東京TDC年鑑にて掲載予定です。

■デザイン学科2年 畠山瑛護さんが制作したオンラインゲームが地方新聞6社で紹介されました。

デザイン学科2年 畠山瑛護さんは宮城県気仙沼市出身で、2011年の東日本大震災の経験を通して津波避難を巡るオンラインゲーム「気仙沼クエスト3・11エディション」を制作しています。防災知識を学ぶ形式ではなく、いざという時に感じる心の葛藤に焦点を当てたアドベンチャーゲームです。制作者本人の当時の体験を基に震災によって得た教訓を未来へ伝えるべく制作しました。

[掲載誌] 山形新聞、デーリー東北、秋田魁新報、伊勢新聞、神戸新聞、山陽新聞、四国新聞

*気仙沼クエストWebサイト：<https://www.numaque.com/>

■JAGDA国際学生ポスターアワード2022にてデザイン学科生が入賞・入選しました。

国内外の優れた若い才能の発見と顕彰、およびグラフィックデザインの新たな発展と進化を目的に日本グラフィックデザイン協会(JAGDA)が創設したJAGDA国際学生ポスターアワード2022にてデザイン学科13名の学生が入選し、うち1名が入賞しました。今年のテーマは「Voice」でした。〈以下敬称略〉

[入賞者(マスナビ賞)] 住 風花(3年)「SIGN LANGUAGE」

[入選者] ショウ シンイン、中村 蒼葉、リン ギシン(以上3年)

秋場 美佑、今美 祐香子、小田木 りえ、潟山 穂乃香、
笹川 真歩、里村 楓悠、清水 遥、前野 菜里、宮川 遙
(以上2年)

*JAGDA国際学生ポスターアワード2022 Webサイト：

<https://jagda-gakusei.jp/>

2022年日芸祭報告

令和4年11月3日(木・祝)・4日(金)・5日(土)3日間に開催された日芸祭は、3年ぶりの一般来場者を迎えて行われた。校友会は今回初めて中庭の校友会テントと図書館閲覧室での日本大学芸術学部写真学科女子卒業生有志の会あじさい会写真展「紫陽花」を企画した。

<交流処>

校友会のテントは昨年購入して初お披露目となり、昨年度の総会で承認され設立した東京江古田会の協力の元、卒業生たちが立ち寄る交流の場となった。

<校友会企画展>

タイトル：日本大学芸術学部写真学科女子卒業生有志の会
あじさい会写真展「紫陽花」

期 間：2022年11月3日(木)～11月5日(土)

会 場：日本大学芸術学部西棟4階図書館内閲覧室

時 間：10:00～16:00 最終日は15:30まで

参 加 者：17名

伊波多紀子、梅村貴子、落合のり子、金子和代、木村佳代子、高喜仙、小島安佐子、しばたきよみ、庄司佳子、蘇明姫、高橋法子、田沢健美、田中光子、種房千保子、福島晶子、和田ひとみ、和田美代子



2023年校友会企画展予定

タイトル：Railway 髭おやじとゆかいな仲間たち
(日本大学芸術学部写真学科卒業生 鉄道愛好会)

期 間：2023年11月3日～11月5日

会場予定：日芸校友会ブース

内容予定：写真展とジオラマ展示



木村学部長からサプライズ寄付!!

令和5年2月16日(木)に開催した第6回校友会常任幹事会にて木村政司学部長より令和4年度3月末で学部長を退任されるご挨拶と、校友会へ100万円の寄付をくださいました。3月9日(木)に田上会長より感謝状と御礼の品を木村学部長にお渡ししました。校友会活動にご理解とご協力を頂きありがとうございます。校友会活動に大切にに使わせていただきます。



寄付を頂きました



学部長に感謝状をお贈りしました



同窓会支援 プロジェクト開始！

校友会が同窓会開催のお手伝いをします！校友会名簿を元に、同窓会開催の案内郵送の住所をラベルにプリント、封筒貼りから発送など、実費で引き受けます！（*ご希望に添えないこともあります）詳しくは校友会までお問い合わせください。



新写真派協会（写真学科同窓会） の皆様へ

2023年も対面の総会・懇親会・新入会員歓迎会は開催いたしません。
是非、7月1日（土）の芸術学部校友会総会後の「75周年記念式典（懇親会）」にご参加ください。写真学科のブースでお待ちしております。

令和4年度より「卒博」は「日藝博覧会」にリニューアルして令和5年3月12日（日）～19日（日）まで対面・オンラインのハイブリッドで開催しました。

下記リンクよりアーカイブをご覧ください。
<https://cross.art.nihon-u.ac.jp/nichihaku>

令和5年賀詞交歓会を開催しました

令和5年1月21日（土）15時より芸術学部江古田校舎において新型コロナウイルス感染防止に配慮し芸術学部校友会常任幹事と芸術学部執行部の共催で賀詞交歓会を開催しました。



新入生歓迎式

令和5年4月8日（土）日本武道館で日本大学の入学式が行われ、同日午後江古田校舎大ホールにて芸術学部の新入生歓迎式が行われ田上校友会長が祝辞を送った。



編集後記

昨年度において芸術分野にもっとも衝撃をもたらしたのは、AIの進化ではなかったでしょうか？ユーザーが打ち込んだプロンプトと呼ばれるキーワードから美しいイラストを生成するMidjourneyの能力に、多くのイラストレーターたちが衝撃を受けました。ただ、AIはWeb上に投稿されている既存のイラストを大量に学習して特徴量を抜き出すものなので、人類の創造物の平均化ともいえます。真に新しいものが問われる時代となりました。（青木）

- 発行人 田上 竣詞
- 編集人 田中 光子
- 会報編集委員 山本 英史、鯉江 充、青木 敬士
- 表紙 三浦 千歳 令和4年度卒業生
「“在”たり前の日々」
- デザイン監修 平林 直人
- 印刷所 江戸クリエイト株式会社
東京都文京区本郷 3-43-16 コア本郷ビル
電話 03-3814-1225

8つのアート1つのハート



日本大学藝術学部

日本大学芸術学部校友会報・第110号

2023年春季号 ● 令和5年5月発行 ●

非売品

不許可転載

●発行所

日本大学芸術学部校友会
〒176-8525 東京都練馬区旭丘 2-42-1
日本大学芸術学部内
電話 (03) 3554-5363
事務担当 星野 祥子

URL : <https://koyu.art.nihon-u.ac.jp/>

メールアドレス : ekoda.koyu@gmail.com



8つのアート1つのハート

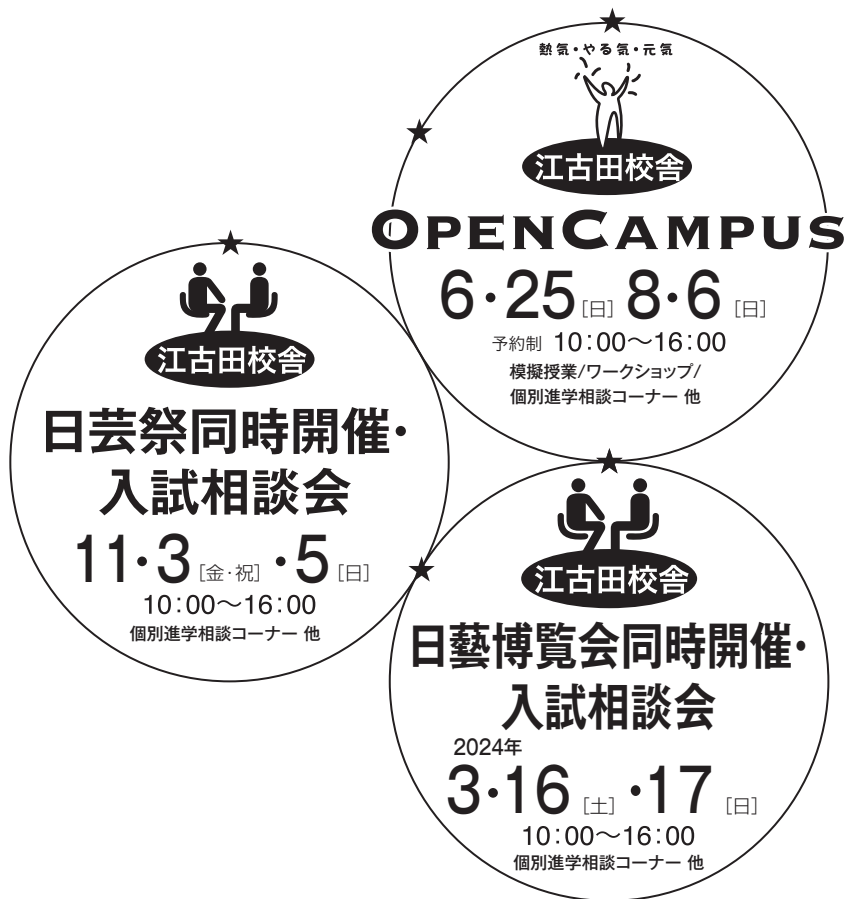
日本大学藝術学部

Photography/Cinema/FineArts/Music/LiteraryArts/Theatre/Broadcasting/Design

◆ 大 学 院 芸 術 学 研 究 科 ◆

◇博士前期課程／文芸学専攻／映像芸術専攻／造形芸術専攻／音楽芸術専攻／舞台芸術専攻

◇博士後期課程／芸術専攻



8つのアート1つのハート



日本大学藝術学部

<http://www.art.nihon-u.ac.jp/>

■ 江古田校舎 練馬区旭丘 2-42-1 TEL.03-5995-8282